

夜間学校 ニュース

1987年9月11日
西成区萩之茶屋2の
8の9 旅路の里気付
釜ヶ崎夜間学校

在日朝鮮人・韓国人の
指紋押なつ拒否断固支持！
定住外国人に市民権を

取安の取締り強化

どうなる どうする

みんなでつくろう
みんなの 会館
三人よれば何とかの知恵

毎週金曜日
夜七時より
市民館三階

釜ヶ崎夜間学校

先週の夜間学校は、ひさしぶりに、無い知恵をしぼりだそうと、マジメに話をした。話題は、あいらん取安の取締り強化で、アブしさをとらえなくなっている仲間が増えていることについて、仲間が伝えてくれた話によると、手帳を取り上げられて、自殺にまで追い込まれた仲間も出てくる。事態

は深刻であり、マジメに取り上げざるを得ない。一人の仲間はいう。『だいたいやな、十四日、仕事を保障してくれたらええわけや、そのせいで、仕事のな時はほったらかし、それいせ、肝心なときにアブしさをとらえんことになる。今のシステムそのものが、おかしいんや。』(うらへん)

愛隣会の演芸会の夕べで 主催者が労働者に暴行

九月九日夜、三角公園で愛隣会主催の、演芸会の夕べなるものが開かれた。当日まで知らなかったが、音が聞こえてきたので、三角公園に行く。女性の歌手が歌っていた。舞台近くナニワの前に行つたところ、誰か舞台から二、三人がかりでおろされ、そのままキトリ足とりされてナニワに追い出入口まで運ばれていった。

舞台に上つて女性歌手にだまっ、こうとしたか、握手しようとしたのを、主催者側が排除したのたううと見ていると、地面にドスンとおろすなり、ゴゴゴとばし始めた。そこまでははいきすぎというもので、ちよつとして、西成署の私服がニヤニヤしながら、こつちへ行ったかたごときいながら、後だてにしていれば、やりほうたいという

ことらしい。釜ヶ崎の労働者を腹のなかで罵るに、とながら、労働者をなぐさめるために、とはどういふことだ。

それに賛同する仲間が、続け

る。」「そや、システムがおかしいん

や、そやから、保険いうんやか

ら、保険料さえ払うたらええん

やろ、仕事がなくって働かれへん

ときは、自分で保険料払うここ

にしたらええねん。十六番に、

保険料・持っていつて、取金の

スタンプ押してもらうというこ

とにしたら、誰もヤミ印紙なん

か買えへんで。」

「これだて、ほぼ現状とかわり

ないことになる。」

「今でもヤミ印紙などはない。

少なくとも印紙が貼ってある限

り、印紙の分の保険料は納まっ

ているのだから。」

「取金の今の取締まりは、働い

た現場を問うことでおこなわれ

ている。働いていないのに印紙

が貼ってあるのが不正だ。」

うわけだ。

しかし、なぜ、働いた現場を

報告しなければならぬのたろ

うか。

「印紙については、それを貼っ

た者から、毎月取金に対して何

枚貼ったかの報告がでているは

ずだし、貼ってある印紙にギ間

があるのなら、貼った者に問

合わせればよいのに、なぜ労働

者の側にシフトをさせるのか。

先々週、聞いた話では、働い

た現場を報告せよという取金に

対し、ともかく一週間はマメに

顔をだして、ウヤマヤにしたん

が、いるということだ。

阪神電車、海傍の方だったと

か、現場まで連れて行ってくれ

たらすぐ思い出すんだけど、近

くにタバコヤがあるからすぐめ

かるなどと、ともかく、取金に

顔を見せて、思い出す努力を見

せる、それで助かったという。

それじゃ、仕事に行かれへん

で大変やろ、と言うと、アブシ

さを確保しようと思っただら、それ

ぐらい努力せよ、との答え……

またしても、しかし、なぜ、

労働者の側が、こんな努力させ

られなければならぬのか。

先週の参加者はいう。

「NHKの釜ヶ崎物語(多岐重)

を見たけど、やせてるから、体

がなさそうで仕事につきにくい

人がでてた。わし、ふとってる

けど、やっぱりみかけやないわ

な、ゆしは一人の生活が長いか

ら、栄養がかたよってツウ圓ヤ

く、アル中や、十四日目標でガ

ンバル人やけど、どうしても、

一日、二日、足りるときはある

やな。

役所の人間は、アブシの制度

だけやなくて、福祉の制度がほ

かにもあると気軽にいうけど、

どこが面倒みてくれるぬん、ホ

更相なんが相手にしてくれへん

で。」

「いくら生活のためでも、それ

は相当がちがう、な人でいいわ

たら、役所の手続きに追われりて

それこそ生きていかれへんよう

になるわ。」

「分会の交渉について行ったと

きに、雑談では、府のやつが、

最近、釜ヶ崎は高令化で暴動お

こす元気もなりでしよう、いう

てたな。」

「そやから労働者を締め上げほ

うだいや、いうわけかいな。」

「そこからは話は、暴動が必重と

いうのと、一万人いや三千人ぐ

らいが団結して府へ押しかけれ

ばちよってば変わるという、マ

ア共バクセンとした方向へ流

れた。本当に、どうする！」